



# 大竹中学校だより

〒739-0614 広島県大竹市白石一丁目 8-1  
☎(0827)52-5177 Fax(0827)52-5178  
【HP】members.fch.ne.jp/otakejhs/



-いのち輝く学校-  
令和5年2月1日(水)  
第37号  
大竹市立大竹中学校  
校長 十亀 琢磨

☆☆「大竹中学校だより」カラー版は、大竹中学校ホームページでご覧いただけます。☆☆



## 2-3 ハートプロジェクト「生きるって何？」



誰もが大切だと感じていること…それが、生きることなのではないでしょうか。与えられた命とどのように向き合っていくか、私たち2年3組では答えのない問いについて考えました。

まず、どんな時に生きているとを感じるか。食事をしている時、人や動物の死に直面した場面、助けられた時、人の役に立った時など、感じ方は様々です。でも、「私、生きているな」と毎日思いながら生活しているわけではないですよね。それは、生きることが当たり前になっているからだと思います。人は、当たり前のことを失って初めて当たり前のありがたさを痛感します。しかし、時間が経つとその時の気持ちは忘れてしまうのです。

みなさんは、家族や友達など大切な人のことが分からなくなってしまう自分を想像できますか？私たちは「おじいちゃんの手帳」という本を読み、一人のおじいちゃんの生き方について考えました。認知症になったおじいちゃんは、手帳に自分の名前や家族の名前、予定などを書いて、記憶を確かめながら毎日を送っています。今日は何月何日何曜日ですか。あなたの名前は何ですか。その質問に答えておじいちゃんの日が始まります。家族みんなの時、おじいちゃんは同じ話を何度も繰り返し話します。お父さんは「その話はさっき聞いたよ。もう黙っていて」と怒ったように言います。おじいちゃんはしょんぼりして、自分の部屋に行き、その手帳をこっそりと広げています。そして手帳に書いた自分の名前を何度も声に出して練習するのです。おじいちゃんの気持ちはどうだったのでしょうか。私たちは考えました。「こんな自分になってしまったことが怖くて、不安な毎日だったと思います。」「周りに自分のことが分かってももらえなくて悲しかったと思います。」「家族や周りの人に迷惑をかけて申し訳ない気持ちもあつたと思います。」など、おじいちゃんに寄り添う意見がたくさん出てきました。おじいちゃんは時々手帳を持って、スーツを着て、ネクタイを締めて、帽子をかぶって、「行ってくるよ」と言って、朝家を出ます。おじいちゃんは昔、学校の校長先生でした。その様子から、おじいちゃんの大変な記憶は、学校の先生をしている自分の姿でもあつたのかなと思います。おじいちゃんは今がいつなのか分からなくなっていて、今を校長先生だったころだと思っているのです。認知症の症状が出るようになった人は、自分の一番楽しかった時や一生懸命仕事をしていたころに戻るそうです。おじいちゃんにとっては、校長先生の時が一番楽しかったのかなと思います。認知症は、自分の名前や家の名前が分からなくなってきました。おじいちゃんの手帳には、おじいちゃんが忘れたくないことがいっぱい書いてあるのです。おじいちゃん的一生懸命生きようとする姿に、私たち自身が生きることに対して、生きるとは何かを教えられたような気がします。

あなたは、与えられた命とどのように向き合いますか？最後にクラスで出た意見を紹介します。

- ・決められた時間、命を人の役に立つことや、誰かを幸せにすることができる生き方をしたい。
- ・大人になって今までこう生きてきてよかったと思えるように自分ができることを精一杯頑張る生き方をしたい。
- ・うれしい、悲しいという感情を持てるのが生きるということ。どんなことも全力で楽しめるようにしたい。

みなさんも時々でよいので、与えられた命とどのように向き合っていくか、考えてみてください。

生きていると感じる場面が人それぞれのように、生き方は、人それぞれです。どのように生きるのか、それは誰かと同じである必要はありません。生きるということを大事にしなくてはいけないと思う心が大切であり、どう生きるか、それを意味づけするのは自分自身なのです。



# 発表を聞いての感想の紹介



私のひいおじいちゃんが認知症になってしまい私のことを忘れてしまっているけれど、私はひいおじいちゃんとの大切な思い出があるし、私との思い出が忘れ去られていたとしても、大切なひいおじいちゃんには変わりないので今ある限られた時間を大切にしたいと思いました。生きていることの大切さ、生きることの大切さを知りました。今ある時間、友達や家族と過ごす時間を大切にしたいです。

(1年1組)

生きることは当たり前じゃないことに気付かされた。

認知症のおじいちゃんの話聞いて、自分や家族の誰かが認知症になるかもしれないことに気がつき、そうなる未来を想像すると怖いんです。

自分以外の誰かにもなってほしくないです。

こういうことを考えた時に生きることは当たり前じゃないことを思い出します。

(1年2組)

今、普通に家族や友達と過ごせるのは、当たり前のことではないこと、もし、友達や家族が一人減ってしまったら当たり前だった生活が違う生活になることがわかりました。違う生活になってしまうということは、その人が自分を支えていたことだと知りました。後、何十年生きる中、楽しいことや苦しいことなど、色々な感情に出会うけれど、くじけず今できることはして、悔いの残らない生き方をしたいこうと思いました。

(1年3組)

自分の思い出を忘れていくということは、とても怖いと感じました。

自分のじいちゃんやばあちゃんが自分との思い出や名前を忘れたら本当に悲しい気持ちになると思いました。そんなことは想像もしたくないです。

人生嫌なこともあると思うけど、楽しい人生だったと思えるように生きていきたいと思いました。

(2年1組)

今後自分のおじいちゃんが認知症になってしまったらと考えると、同じ話をされるのが苦手な自分には耐えられないと思うけど、したくて、同じ話をしている訳ではない、おじいちゃんの気持ちも考えないとと思った。

手帳に何度も何度も書いて家族のことを忘れないようにするおじいちゃんは、本当に大事な家族だと思っているんだなと思った。

(2年2組)

自分の大切な人や記憶を失ってしまうのは、その人にとっては何も思わないかもしれないけど、周りの人にとってはつらいことだと思いました。

認知症のせいで同じ話をしているのに家族からは反対ばかりされ、認知症になってしまった人もつらいと思います。なので認知症に対する理解を深めていくことが大切だと思いました。

(2年3組)

「おじいちゃんの手帳」の話聞いて、おじいちゃんはずごとと思いました。認知症になっても手帳に忘れたくない思い出を書いて、強く生きるために頑張っていると思いました。家族や言葉など全てのことを忘れてしまうのは不安だけど、毎日毎日が大切な1日だなと感じました。普段、今日も生きていると感じることはないけど、生きていけることがすごいことだと思うし、当たり前であることでも大切にしていけることが大事だと思いました。

(3年1組)

自分は家庭科の時間で認知症のおじいちゃんやおばあちゃんなどを介護する人の話を聞いたことがあります。2年3組のハートプロジェクトのように怒った言い方などではおじいちゃん、おばあちゃんはずごと悲しくて、その人が誰だか分からなくなるそうです。だから認知症などの人と会話する時は優しく話そうと思いました。生きるということは、自分の限られた人生を精一杯楽しむことじゃないのかなと思いました。

(3年2組)

認知症は、大切な記憶、思い出も忘れさせてしまうんですね。苦しくても、痛くても産んでくれた母親や育ててくれた家族、支えてくれたたくさんの人々と生きていくことが、私にとっての「生きる」です。

生きることは、とても大切なことで、生きていなければ、家族や友達と話したり遊んだりすることもできません。大切だからこそ、命をもらっていることに感謝して生きていかなければならないと思いました。

(3年3組)